

旧大乘院庭園の調査

—第352次

1 調査の経緯と経過

平城宮跡発掘調査部では、本庭園を管理する（財）日本ナショナルトラストの委嘱を受け、復原整備に向けた資料を得るため、1995年から毎年継続的な発掘調査を実施してきた。今回の調査は、平成14年度事業の一環として西小池（南池）の想定地および東大池西岸の築山を対象に、2003年1月7日から開始し3月12日に終了した。調査面積は267.5㎡である。

これまでの調査は、東大池の周囲を中心に南岸から東・北岸へと進めてきたが、第310次調査からは西岸部を対象としている。文献・絵図による研究から、この地区には変化に富んだ景観をもつ「西小池」の存在が知られていた。しかしながら、西小池は明治の前半には埋め立てられており、発掘調査による実態の解明が期待された。昨年度の調査からは、昭和14年に『庭園』・『風景』誌に紹介された平面図と重ね合わせることで、検出遺構の比定、あるいは発掘前の推定を試みている。

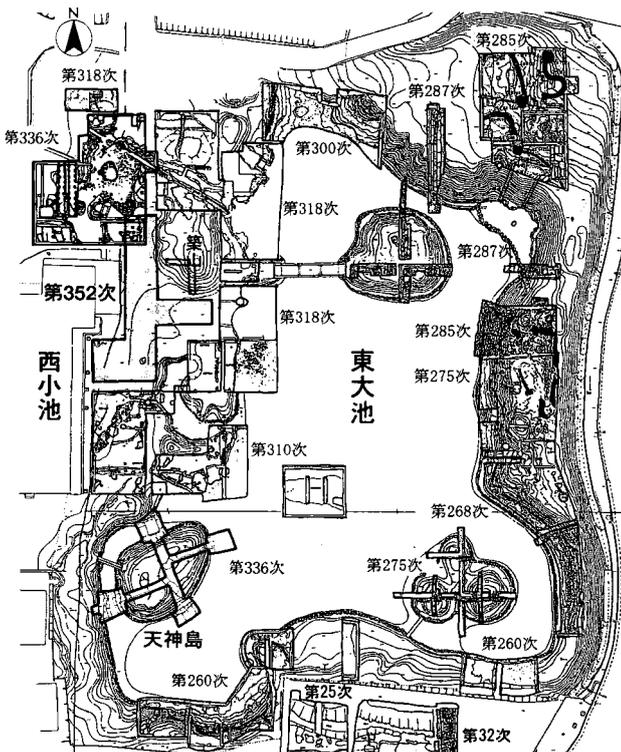


図165 第352次調査区位置図

事前の予測では今回の調査地には、西小池南池の北岸および東岸、興福寺蔵『大乘院四季真景図』に「ヲシマ」と記された中島の東半部、および「ヲシマ」から「連ナリハシ」によって結ばれた小島と対岸部、東大池と西小池を結ぶ流路の西岸にあたる嘴状の岬などが存在するものと考えられた。調査の結果、これらの遺構をほぼ予測された位置で検出し、西小池復原における同図の資料的な価値をあらためて確認した。

2 調査成果の概要

西小池南池は、北池同様に地山を削りこんで造られており、島・岬の高さを考えると、水深は20cm程と推定される。北岸は広い範囲で削平を受けていたが、本来は勾配のきつい崖状であったと考えられる。また、約2mの範囲に石の集中する箇所があり、岩島状のものが存在した可能性がある。東岸についても、池底からの比高差が1m程認められた。また、盛土造成により約3mほど汀線を西に移動させていることも判明した。

ヲシマとされた中島の東半部は、池底からの高さが40cm、半球形に地山を削り残してつくられており、周囲には石組がみられる。基底部の周囲には石や土を押さえるための木材を多角形になるように置き、杭で挟むようにしてとめていた。また、ヲシマから南に連なる小島（もしくはその対岸部に相当）では、縁まわりの石組に加えて直径4cm程の白い玉石が撒き敷かれていた。

東大池と南池をつなぐ流路の西岸では、南北4m、南端で幅4mの範囲で地山を削り残した嘴状の高まりを確認した。森蘊は、西小池の復原にあたり、ヲシマから連なる小島と嘴状の岬のありかたが、京都桂離宮松琴亭前の天橋立と州浜の意匠に酷似することを指摘している（『中世庭園文化史』奈文研学報第6冊 1959）。

南池の造営に先立つ遺構として、池底および池岸の石組の下で東西方向の溝を確認した。また、池の最初の埋立て土をはさみ、その上下で硯・石盤・石筆などの文具が出土したことから、南池の埋め立ては明治16年の飛鳥小学校校舎新築時におこなわれた可能性が高い。

東大池西岸の築山については、植栽保護の理由からトレンチ調査を実施した。頂部で厚さ約1mの盛り土がなされており、築山の南半部は、現状よりもかなり低平なものであったことが判明した。 (次山 淳)



図166 調査区全景 (南から)

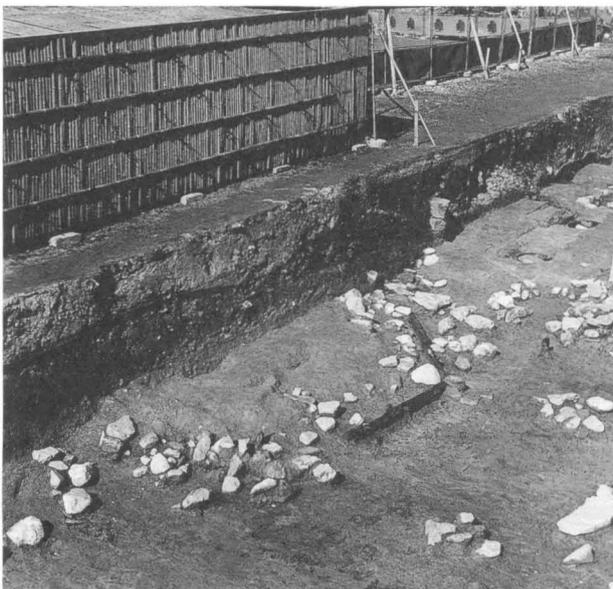


図167 ラシマ検出状況 (南東から)



図168 小島東岸の白い玉石敷 (南東から)